

サッフォーを「創る」ルネ・ヴィヴィアン

——訳詩集における真正の同性愛者としてのサッフォー像——

長 澤 法 幸

Renée Vivien, *Creator* of Sapho
— Study on the exclusive lesbian figure of her Sapho —

Noriyuki NAGASAWA

Abstract

In this article, we treat the originality of Renée Vivien, analyzing the figure she gives of Sapho in her collection of translations of the Greek poet, Sapho, *Traduction nouvelle avec le texte grec*. First, Vivien readjusts the traditional biography of Sapho, deleting the names of the husband Kerkolas, who came from another island to marry the poet, and the legitimate daughter born of this marriage, Kléis. However, Vivien does not only exclude them because of anger. She has her reasons. She writes in her autobiographical novel that the name Kerkolas means who wears the pen(is), and that it is only an “abject joke.” Then, Vivien reinterprets a fragment of a poem generally considered to be addressed by Sapho to her lawful daughter Kléis, noting in her translation that Kléis is likely a young slave. She further proclaims that the bourgeois morality has taken possession of a fragment of Psappha (Psappha is the Aeolian name of Sapho). What is “bourgeois morality”? A letter from Émile Zola clarifies the concept, in which the writer thinks that people kill life when they no longer do what it takes to make children. However, Zola does not ignore or hate homosexuals; rather, he is interested. He wishes to know the homosexual problem, but feared prosecution via public condemnation if he wrote about homosexuality. “The bourgeois morality” is a current that attaches importance only to social conveniences and perpetuation of the human race to the point that one dares even to distort literature. Finally, Vivien attempted to rewrite the literary legend that Sapho jumped from Leucade because of the lost love of a man, Phaon, a legend transmitted by an elegy of Ovid that Wharton incorporated into his book, annexed. In this elegy, Sapho abandons her lover Atthis. Vivien replaces Atthis in her translation with her own poem, in which Atthis is still beloved. It is a challenge of Vivien who puts her pride in naming herself the “Sapho 1900.”

1. はじめに

本論文は、ルネ・ヴィヴィアン (Renée Vivien 1877-1909) による翻訳詩集『サッフォー *Sapho, Traduction nouvelle avec un texte grec*』、および他の作品の読解を通して、詩人が独自に作り上げたサッフォー像の提示を目指すものである。

この詩集は、1903年にアルフォンス・ルメール社から出版され、サッフォーのギリシア語原詩、ルネ・ヴィヴィアンによるフランス語散文訳、韻文のフランス語翻案の三部から成るもので、翻訳であると同時に詩人の創作であるという側面を持っている。前書き、サッフォーの評伝、サッフォーの作品と続く構成上の類似や、後述するように記述の内容に同一の箇所が多く見られること等から、この詩集は1885年にイギリスで出版されたウォートンの校訂版 (Wharton, Henry Thornton, *Sappho, A Memoir, Text, Selected Renderings and a Literal*

Translation, London, 1885) を底本にしていると思われるが、これが直接の底本であるかどうかは帰納的に証明したい。ウォートンの書については、ドイツの古典学者ベルクによるラテン語版校訂訳『ギリシアの抒情詩人たち』(Theodor(us) Bergk, *Poetae liryci graeci*, tome. III, Leipsiae In aedibus B.G. Teubneri, 1882) を底本としていることが作者ウォートンによって明言されており、ごくわずかな例外を除いてギリシア語テキストの配列の順番も同じである。ベルクの校訂本はギリシア語テキストと、ラテン語による注があるだけだが、ウォートンはギリシア語テキストに英訳を付したばかりでなく、広範に資料を収集してサッフォーの生涯や、近代における受容についての極めて充実した記述をも収録した。

2. 異性愛者でないサッフォーの創造

先に述べたように、ルネ・ヴィヴィアン、ウォートンの両者ともが、詩に先立ってサッフォーの評伝を掲載しており、それにはサッフォーの家族構成も含まれているが、ヴィヴィアンの意図的な操作はこの段階ですであらわれている。この部分は単なる情報の列挙であるため、文彩については特筆すべきものはないが、その分詩人の意図が明確に表れているといえよう。ウォートンとルネ・ヴィヴィアンの評伝を続けて引用する。

サッフォーの両親についてははっきりとはわかっていない。ヘロドトスは彼女の父親をスカマンδροニユモスとし、母親の名はクレイスであるとした。彼女には二人の兄弟がいた。カラクソスとラリコスである。スーダ辞典は三人目にエウリュギウスなる者がいるとしているが、彼については何もわからない。スーダ辞典によるとサッフォーはケルコーラスというアンドロス出身の大変裕福な男と結婚しており、彼との間に娘を一人もうけている。その名をクレイスという⁽¹⁾。

このレスボスの詩人は紀元前 610 年頃生まれたに相違ない。ヘロドトスは父親の名前をスカマンδροニユモス、母親をクレイスと伝えている。彼女には二人の兄弟がいた。ラリコスとカラクソスである⁽²⁾。

ウォートンの方にあり、ルネ・ヴィヴィアンの方にない名が三つあることがすぐにわかるであろう。三人目の兄弟のエウリュギウス、夫ケルコーラス、そして娘クレイスである。その人について何も知られていないと明記されているエウリュギウスはともかく、夫、娘についてはあえて言及を避けていると考えられる。しかしながら、ルネ・ヴィヴィアンの批判は単に感情的になされているのではない。詩人が、1904年に発表された自伝的小説である『一人の女がわたしのもとに現れた *Une Femme m'apparut...*』の第二章において、サッフォーの夫とされるアンドロス島のケルコーラスの存在を否定するにあたって理論的な基盤を与えているのが興味深い事実として挙げられる。

夫とされるこの男は、スーダ辞典によると嫁を求めてアンドロス島を去ったという。しかしこの夫の名ケルコーラス(『陰莖を備える者』の意)やその祖国の名は、これらを生み出した品のない冗談の類を十分に示しているでしょう。そもそも、外国の女を娶るために生家を離れる習慣なんて、ギリシア人にはないのだから⁽³⁾。

(1) Of Sappho's parents nothing is definitely known. Herodotus calls her father **Scamandronymus**, [...] Her mother's name was **Cleis**... She had two brothers, **Charaxus** and **Larichus**; Suidas indeed names a third, **Eurygius**, but nothing is known of him... Suidas says Sappho "married one **Cercolas**, a man of great wealth, who sailed from Andros, and," he adds, "she had a daughter by him, named **Cleis**." (Wharton, Henry Thornton, *Sappho, A Memoir, Text, Selected Renderings and a Literal Translation*, London, 1898, 4th edition, p. 3-7)

(2) ... L'Àède de Lesbos dut naître vers 610 avant Jésus-Christ. Hérodote nous apprend que son père se nommait Skamandronymos et sa mère Kléis. Elle eut deux frères, Larichos et Charaxos. (Renée Vivien *Sappho, Traduction nouvelle avec un texte grec*, Lemerre, 1903, p. viii)

この一節については多少説明を要するであろう。夫の名前ケルコーラスと、その故郷の島であるアンドロスは、それぞれ陰莖 (κέρκος⁽⁴⁾)、男 (άνδρός)、という意味のギリシア語に音声が類似しているとの指摘があり、これらの名はサッフォーの同性愛的傾向を揶揄するために後世の喜劇作家が捏造したものであるとの説がある。特にケルコーラスについては、現存するサッフォーの詩片に一度もその名前が現れないことから、捏造であるとの説が一層有力視されている。ウォートンも文中でこの旨を記述しており⁽⁵⁾、殊にケルコーラスという名前については懐疑的な見解を示している。また、「ギリシア人の間で配偶者を求めて故郷を離れる習慣はない」との件もウォートンは明記している⁽⁶⁾。自伝的小説におけるこのような記述は、ヴィヴィアンが理性的かつ実証的な筆致によって、サッフォーの異性愛説を退けようとしていたことと同時に、ウォートンの書物を丹念に読み込んでいたことの根拠にもなるであろう。

また、ヴィヴィアンは訳詩に注を付けることによってサッフォーの男性への愛情を否定する作業を幾つかとっている。その例を二つほど挙げよう。

立て 向かい合って 愛しい人よ ……
Στᾶθι κάντα φίλος …

そして 上に 両目の 広げよ 優美さを
καὶ τὰν ἐπ' ὄσσοις ὀμπέτασον χάριν

わが友よ、向かい合って立ったままでいて……そして君の両眼に宿る慈しみを曝してほしい。
アルフレッド・シュエネによると、これらの詩行はサッフォーの兄弟に向けて書かれたらしい⁽⁷⁾。

内容に言及する前に、ヴィヴィアンの訳が、原文から少々距離があることを指摘しておきたい。Στᾶθι と、その訳である *demeure debout* とでは動作性が少し異なる。Στᾶθι は、「立てる」という意味の動詞 ἵστημι の第二アオリスト命令形であり、「立つ」という動作をまだしていない状態のときにそれを促す発言である。それに対して *demeure debout* は、すでに「立つ」という動作をした状態をさらに継続することを促す発言であるという違いがある。以下のようにウォートンはこの動作性を尊重した訳をしているため、ヴィヴィアンがこのように訳した理由は判然としない。

Stand face to face, friend and unveil the grace in thine eyes.⁽⁸⁾

内容の面でも指摘できることがある。下線部は訳の後にヴィヴィアンが付けた注であるが、この注にあたるものはウォートンの方にも存在する。しかしこの注の付け方も意図的なものである。比較のため、この断片に付されたウォートンの注の全文を以下に引用しよう。

恋人の目の魅力に言及しているアテナイオスは、この詩は、サッフォーが何よりもその美しさを讃えられていたある男に向けて書いたものであると述べている。ベルクはこれをファオンへの詩の一部 (140 番

(3) Ce prétendu mari [...] aurait, d'après Suidas, quitté l'île d'Andros en quête d'une épouse. Mais le nom de l'époux, Kerkolas, *qui porte la plume*, et celui de sa patrie indiquent suffisamment le genre d'abjecte plaisanterie qui les enfanta. Ce n'était point, d'ailleurs, la coutume des Grecs de quitter leur cité dans l'intention d'épouser une étrangère. (Renée Vivien, *Une Femme m'apparut...*, Lemerre, 1904, p. 21)

(4) この語は元々「尾 *tail*」の意。これは、現在「ペニス」の意味で用いられるラテン語 *penis* についても同様である。

(5) But the existence of such a husband has been warmly disputed, and the name (*Pēnifer*) and that of his country (*Virilia*) are conjectured to have been invented in ribaldry by the Comic poets; (Wharton, *op. cit.*, p. 7)

(6) certainly it was against the custom of the Greeks to amass wealth in one country and go to seek a wife in a distant island. (*Ibidem.*)

(7) *Demeure mon ami, debout et face à face... et dévoile bienveillance qui est dans tes yeux.* / Selon A. Schoene, ces vers s'adressent au frère de Psappha (Vivien, *Sapho, op. cit.*, p. 138)

(8) Wharton, *op. cit.*, p. 86.

を参照のこと)か、祝婚歌の一つである可能性があると考えている。アルフレッド・シューネは、これをサッフォーの兄弟へ向けて書いたものと推測している。この韻律はとても曖昧である⁽⁹⁾。

尚、ここで参照せよとある 140 番というのはサッフォーの作品自体を扱っているわけではなく、パラエファートス (Palaephatus) という不詳の人物による、ファオーンとアフロディテの伝説の記述を引用したものである⁽¹⁰⁾。ウォートンが収録した 170 の断片のうち、サッフォー自身の作品と断言されているものは 120 番までであり、121 番以降は「雑録 Miscellaneous」と銘打たれた章にあてられ、サッフォーについての古代人の証言や、サッフォーの作と伝えられている断片が収録されている⁽¹¹⁾。この二つの注を比較すると、ヴィヴィアンがウォートンの記述を意図的に抜粋していることがわかる。ウォートンの注においては、兄弟にあてたとするシューネの説のほかに、ある美男子に向けて書かれたというアテナイオス、ファオーンへの詩、あるいは祝婚歌の一部とするベルクの説と、少なくとも四通りの説が挙げられているが、ヴィヴィアンは後者二人の説を秘匿することで、これをあたかも兄弟に向けて書かれた詩として以外の解釈が存在しないかのように読者を誘導しているのである。

二つ目の例として挙げられるのは、サッフォーが自らの娘に宛てて書いたとされる詩片である。まず、サッフォーのギリシア語原文と、ウォートンの英訳、ヴィヴィアンのフランス語訳を続けて引用しよう。

がいる 私に 美しい 子供が 黄金の 花に
 Ἔστι μοι κάλα πάϊς, χρυσοῖσιν ἀνθέμοισιν
 似た 持つ 姿を クレイスよ 愛すべき
 ἐμφέρην ἔχουσα μὀρφαν, Κλήϊς ἀγαπάτα,
 代わりに 彼女の 私は ない リュディアを すべてを ない 愛しい
 ἀντι τᾶς ἔγω οὐδὲ Λυδῖαν παῖσαν οὐδ' ἔραναν.

I have a fair daughter with a form like a golden flower, Clais the beloved, above whom I [prize] nor all Lydia nor lovely [Lesbos]....⁽¹²⁾

Je possède une belle enfant dont la forme est pareille à des fleur d'or; Kléis la bien-aimée que je [préfère] à la Lydie tout entière et à l'aimable...*

*πάϊς doit très probablement être pris ici dans le sens du jeune esclave⁽¹³⁾.

原文と訳について一言付すると、原文の三行目の主語 ἔγω (= I, je) には対応する動詞が存在しないが⁽¹⁴⁾、英仏訳にはそれぞれ *prize* 「尊ぶ」、*préfère* 「より好む」が括弧書きで補われている。原文と二つの近代語訳を比較すると、一見大きな違いはなく、いずれも指摘すべき重大な誤りはない。しかし、殊更に目を引くのは、ヴィヴィアンが訳に付した*の注であろう。一見すると少々無理のある解釈とも思われるこの注が、実は十分に正

(9) Athenaeus, speaking of the charm of lovers' eyes, says Sappho addressed this to a man who was admired above all others for his beauty. Bergk thinks it may have formed part of an ode to Phaon (cf. fr. 140), or of a bridal song; and **A. Schoene suspects that it was possibly addressed to Sappho's brother**. The metre is quite uncertain. (*Ibid.*, p. 87)

(10) Wharton, *op. cit.*, p. 165. レスボス島の渡し守の老人であったファオーンは、女神アフロディテをそうとは知らずに船に乗せ、運賃を取らなかった。それに心を打たれたアフロディテがファオーンを美青年に変えた、というのがこの伝説の要旨である。サッフォーの詩にはこの挿話に主題をかりたものがあり、伝説を歌ったこの詩が、時代を経るにつれて曲解され、サッフォー自身がファオーンに恋をしてレウカスから身を投げたという文脈にすり替わったというのが現代における定説である。

(11) ここでいう古代人の証言とは、後世の修辞学者によるサッフォーの詩の引用や、哲学者による言及のことを指す。ロンギノス『崇高について *Περὶ ὕψους*』におけるサッフォーの詩の全文引用 (Wharton, fr. 2) や、『ギリシア詞華集』におけるプラトンの「レスボスのサッフォー、彼女は十番目 [の詩女神] Σαπφὼ Λεσβόθεν, ἡ δεκάτη」という発言などはその代表格である。

(12) *Ibid.*, p. 122.

(13) Vivien, *Sappho, op. cit.*, p. 113.

(14) サッフォーが詩作の段階で意図的に動詞を省略したのか、それとも元々はあったが断片となった際に脱落したのかを明らかにすることはもはや容易ではない。

当性をもつものであるということについては拙稿を参照されたい⁽¹⁵⁾。ここで注目したいのは、ルネ・ヴィヴィアンがこの詩の翻訳と付注を、単にサッフォーの性的指向を規定するだけでなく、当時のブルジョワ社会を批判する材料としても用いているという点である。小説『一人の女がわたしのもとに現れた』の第二章では、サッフォーの家族構成のみならず、詩の解釈についての議論もなされているが、以下のような文脈でこの詩が言及されている。

下劣なブルジョワの道徳は、プサッファの断片をも侵略してしまった [中略] 恋する少女奴隷クレイスを嫡子にしてしまうために⁽¹⁶⁾！

今論じている詩片の仏訳は、上記引用の [中略] の部分に一言一句違わずに引用されている。ヴィヴィアンによると、この詩をサッフォーが自分の娘に宛てて書いたものだと解釈すること自体が、ブルジョワ道徳に毒されたものであるというのである。

3. 世紀末と同性愛。ゾラの書簡を一つの手掛かりに

では、ヴィヴィアンがここまで苛烈に批判する「下劣なブルジョワの道徳 *La morale bassement bourgeoise*」とはいかなるものなのであろうか。エミール・ゾラの書簡は、当時のブルジョワジーが少数派をいかに擧蹙と恐怖の対象として見ていたかを端的に表している。

性に関わるすべてのことは、社会それ自体にも関わります。倒錯者は家族、国家、人類の破壊者なのです。男と女は、この世においては子をなすためにあり、そのためにしなければならないことをもはやしなくなるその日、生命を殺すことになるでしょう⁽¹⁷⁾。

この書簡は、1895年6月25日付のもので、軍医であり作家でもあった友人のジョルジュ・サン＝ポール (Georges Saint-Paul) に宛てて書かれたものである。ゾラはそれ以前に、ある同性愛者のイタリア人男性から、自身の告白を基にした小説を書くように打診する手紙を受け取っていたのであるが、ゾラはそれを断り、その執筆をジョルジュ・サン＝ポールに依頼したのである。この小説は「ある倒錯者の告白 *Le Roman d'un inverti*」と題され、『犯罪人類学目録 *Archives d'anthropologie criminelle*』誌に1894年から1895年にかけて連載された。

ドミニック・フェルナンデスはこの書簡と事実とをもって、同性愛を「ゾラの無視した唯一の情熱形態」と評したが⁽¹⁸⁾、これは若干の誇張であるといえる。ゾラ自身も同性愛という現象に深い関心を持ってはいたものの、作家ではなく医師の立場にある者がこれを論じる方が、同性愛という問題により大きな貢献を果たすことができると思っていたことがこの書簡には明記されている。

私のような一介の作家があえてしないことを、あなたが識者として成したことをとても喜ばしく思います。既にもう数年前のことですが、このあまりに興味深い文書 [引用者注：前述のイタリア人からの手紙のこと] を受け取った時、それがもたらす生理学のおよび社会的な関心の大きさにわたしは心打たれました

(15) 長澤法幸、「ルネ・ヴィヴィアン訳詩集『サッフォー』—訳詩集の成立を巡って—」、『研究報告集』41号、日本フランス語フランス文学会中部支部、2017年。

(16) *La morale bassement bourgeoise s'est aussi emparée d'un fragment de Psappha [...] pour transformer en fille légitime l'amoureuse esclave Kléis !* (Renée Vivien, *Une Femme m'apparut...*, Lemerre, p. 21-2)

(17) Et puis, tout ce qui touche au sexe touche à la vie sociale elle-même. Un inverti est un désorganisateur de la famille, de la nation, de l'humanité. L'homme et la femme ne sont certainement ici-bas que pour faire des enfants, et ils tuent la vie le jour où ils ne font plus ce qu'il faut pour en faire. (Emile Zola, *Correspondances*, tome. VIII (1893-1897), éditée sous la direction de B. H. Bakker, Les Presses de l'Université de Montréal, 1991, p. 231)

(18) ドミニック・フェルナンデス『ガニユメデスの誘拐』岩崎力訳、ブロンズ新社、1992年、p. 9

た。[中略] 私の引き出しの中で眠っていた記事の一つをあなたに託しました。この記事は医者、そして識者の手によって日の目を見るべきものであり、もしあなたがそれをしたとて、スキャンダルを引き起こそうとした咎で責められることはないでしょう。そして、あなたが「倒錯して生まれる者」というあまり知られていない殊更深刻な問題に、確かな貢献を果たすことを心から願っています⁽¹⁹⁾。

深い関心を示していたものの、作家を取り巻く当時の環境において同性愛を主題とした作品を書くことは、作家生命にかかわるスキャンダルにつながることをゾラは予見していたのである。ゾラは、同書簡において当時の状況を以下のように振り返っている。

私はその時、文学闘争の最も熾烈な時にあり、批評家が毎日のように、私をあらゆる悪や放蕩をなしかねない犯罪者のように扱っていました。そんな中で、私がこの『ある倒錯者の告白』の出版に携われるとお思いですか？ まず、私は個人的な墮落によってあらゆる分野の歴史を打ち立てた咎で糾弾され、続いて、事実の中に最もおぞましい本能についての低俗な思索をしか見ないことを間違いなく断罪されるのです⁽²⁰⁾。

以上のように、同性愛は病理学上の大きな関心事であったと同時に、作家の間ではタブー視されるものであった。この書簡の十年以上後に書かれた、アンドレ・ジッドによる同性愛擁護の書『コリドン *Corydon*』がまず匿名で出版されなければならなかった（1911年、1920年）ことは、こうした風潮が二十世紀初頭においてもなお蔓延していたことを象徴している。

ルネ・ヴィヴィアンの革新的な点は、自ら同性愛者であることを公言し、それを擁護することのみにとどまらず、同性愛に対してしばしば使われる「倒錯 *inverti/aberration*」という語を用いながら積極的に異性愛を攻撃したことにあるといえるだろう。小説『一人の女がわたしのもとに現れた』において、友人である同性愛者の女流詩人サン・ジョヴァンニ（San-Giovanni）が、ゾロアスター教典の研究者であるペトリュス氏⁽²¹⁾に「お嬢さん、男の抗いがたい魅力を逃れようと思ってもむだというものです。あなたの恋愛遍歴は、必ずや一人の男の腕の中で終わるのですから *Mademoiselle, vous tentez en vain de vous dérober à l'irrésistible séduction masculine. Vous terminerez certainement votre carrière amoureuse entre les bras d'un homme. (Une Femme, op. cit. p. 26)*」と皮肉を言われた際、語り手である「私」は以下のように切り返している。

それは自然に反する倒錯というものですわ、先生。そんな異常な情熱をしでかすと信じるには、わたしはこのお友達をあまりに高く評価しているのですから⁽²²⁾。

(19) je suis très heureux que vous puissiez faire, à titre de savant, ce qu'un simple écrivain comme moi n'a point osé. Lorsque j'ai reçu, il y a des années déjà, ce document si curieux, j'ai été frappé du grand intérêt physiologique et social qu'il offrait. [...] Et je vous confiai le document qui dormait dans un de mes tiroirs, et voilà comme quoi il peut enfin voir le jour, aux mains d'un médecin, d'un savant, qu'on n'accusera pas de chercher le scandale. J'espère bien que vous allez apporter ainsi une contribution décisive à la question des invertis-nés, mal connue et particulièrement grave. (Zola, *Ibid.*, pp. 229-30)

(20) J'étais alors aux heures les plus rudes de ma bataille littéraire, la critique me traitait journellement en criminel, capable de tous les vices et de toutes les débauches; et me voyez-vous me faire à cette époque, l'éditeur responsable de ce "Roman d'un inverti"? D'abord on m'aurait accusé d'avoir inventé l'histoire de toutes pièces, par corruption personnelle. Ensuite j'aurais été dûment condamné pour n'avoir vu, dans l'affaire, qu'une spéculation basse sur les plus répugnants instincts. (Zola, *Ibid.*, p. 230)

(21) この小説において、作者であるルネ・ヴィヴィアンは一人称の無名の語り手として登場するが、このサン・ジョヴァンニという人物はその分身としての性格を持つ。また、ペトリュス氏は『千夜一夜物語』の翻訳で知られる、医師で東洋学者のジョセフ・シャルル・マルドリユス Joseph-Charles Mardrus をモデルとする人物。彼の『千夜一夜物語』の翻案（1899-1904）は『マルドリユス版』と呼ばれ、フランス内外で大いに流行した。マルドリユス版は原典より性や恋愛の描写が増加しているのが特徴で、彼はこれを好色文学として紹介している。このことは章の冒頭でペトリュス氏を紹介する際にも書かれており、加えて、語り手によって「彼の口調は、その文体と同様に、吐き気のするにおいや野蛮な色調、すべての粗悪な東洋の悪趣味を想起させました。 *Sa conversation, comme sa manière d'écrire, équivoquait les odeurs écoeurantes, les couleurs barbares, tout le mauvais goût d'un Orient de pacotille. (Une Femme., op. cit., p. 16)*」と痛烈に批判されている。

無論、ゾラのこの書簡のみを通して当時の作家と同性愛を取り巻く環境のすべてを網羅したことにはなりえないが、この文書を読み解くことで、ルネ・ヴィヴィアンが唾棄する「下劣なるブルジョワ道徳」の一端が垣間見えてくることは確かである。一つは、「同性愛者が人類を破壊する」と語ったゾラのように、人間の存在や行為をすべて生産や社会の維持に帰する態度であるといえるだろう。こうした態度を断ずるために、ヴィヴィアンは時に悪魔の手を借りさえする。1904年に出版された『瞽人達のヴィーナス *La Vénus des aveugles*』に収録された不吉な詩「十三 *«Treize»*」はそれを最も露骨に表現した作品の一つであろう。参考としてその一節を引用しておきたい。

アスタロト、ベルゼブト、モロク、ベリアルは
 婚礼の煙れる祝い酒を注ぐ。
 彼らはとるに足らぬ「花嫁」の額を飾る……。
 出生の敵たる大天使ベリアルは
 嬰兒孕む腹に「十三」の数字をなぞる。

アスタロト、ベルゼブト、モロク、ベリアルは
 嬰兒孕める腹に「十三」の数字をなぞる²³⁾。

さらに重要な点として、生産と社会秩序の維持を絶対視するあまり、芸術をも都合よく歪曲する態度を挙げることができる。引用で見たように、ヴィヴィアンの怒りは、サッフォーの作品を、嫡子、すなわち生殖と結び付けるために害することにも向けられている。芸術を政治に利用してはならないといった表明にも似たこの態度には、ルネ・ヴィヴィアンの芸術至上主義的、高踏派的な美学が表れているといえるだろう。

4. 「レウカスからの投身は寓意に過ぎない」—オウィディウス神話の超克

ここまでで論者は、ルネ・ヴィヴィアンが訳詩集『サッフォー』の中で、男性への愛と一切かわりを持たない排他的な同性愛者としてのサッフォー像を確立してきたことを述べてきた。そして、詩人のそうした意識は訳詩集の構成そのものにも影響を与えている。ウォートンの版がオウィディウス『名婦の書簡』第十五歌「サッフォーからファオンへ」のアレクサンダー・ポープによる英訳の全文によって閉じられている一方で、ヴィヴィアンの『サッフォー』の巻末にはヴィヴィアン自作の詩が載せられているのである。本章では、ヴィヴィアンのサッフォー像が、オウィディウス「サッフォーからファオンへ」におけるそれとどれだけ隔たっているかを述べ、ヴィヴィアンが巻末に置いた自作の詩を参照することによって詩人の作為の意図を繙いてみたい。

『名婦の書簡』は紀元前二十年から十六年頃に出版されたラテン語による韻文詩集で、オウィディウスの作品としては最初期のものである²⁴⁾。神話や伝説上の女性を書いた手紙という体裁をとっており、初版には第十五歌までが収められた。そのうち実在の人物を扱っているのはこの「サッフォーからファオンへ」一篇のみであり、その他は神話上の登場人物を扱っている。このことから、オウィディウスの中でサッフォーが神格化された存在となっていたと解釈することができるが、逆に、これが神話を題材としていない唯一のものであるという理由で、オウィディウスの手によるものではないという説を生み出すきっかけともなった。特にこの

22) Ce serait là une **aberration antiphysique**, monsieur. J'estime trop notre amie pour la croire capable d'une passion anormale. (*Ibid.*, p. 27)

23) Ashtaroth, Belzébuth, Moloch et Bélial/ Versent le vin fumeux du festin nuptial./ Ils ont paré le front de l'Épouse niaise.../ Archange ennemi des naissances, Bélial/ Sur les ventres féconds trace le nombre : treize.// Ashtaroth, Belzébuth, Moloch et Bélial/ Sur les ventres gonflés tracent le nombre : treize. (Renée Vivien, « Treize » dans *La Vénus des aveugles*, Lemerre, 1904, p. 68)

24) Ovid. *Héroïdes*, texte établi par Henri Bornecque et traduit par Marcel Prévost, Société d'Édition « Les Belles Lettres », 1965, p. viii

「サッフォーからファオンへ」は『名婦の書簡』の中世の写本には存在しなかったということもあり²⁵⁾、偽作の可能性が示唆されていた。校訂者のアンリ・ボルヌクは、オウィディウス自身が後に『愛の詩集 *Amores*』(紀元前 15-14 年)の中でこの詩に言及していることを根拠に、これをオウィディウスの作品であると断言している²⁶⁾。

「サッフォーからファオンへ」は、ルネサンス期にイタリアで写本が発見されて以来、ヨーロッパ文学におけるサッフォーの表象に多大な影響を与え続けてきた。フランスのロマン主義におけるサッフォー伝説の復活に大きく寄与したラマルチヌやスタール夫人はいうに及ばず、禁断詩篇「レスボス」によって、淫蕩なる同性愛者としてのイメージを打ち立て、近代以降の読者に鮮烈な印象を植え付けたボードレルでさえも、オウィディウスの絶対的な影響下にあるといわざるを得ない。容姿の魅力は乏しいが抜群に冴えわたる詩才を誇るサッフォーが、美青年ファオンに向けて書いたという体裁をとるこの書簡は、220 行にも及ぶ韻文から成り、サッフォーの評伝的な情報や、燃えるような情念があまりに巧みに歌われているため、発見された当初は、サッフォーの作品がそのままラテン語に翻訳されたものとみなされたほどである。

この書簡の中でサッフォーは同性愛から「改心」しており、叶わぬ恋の結末をレウカスカからの投身による死に求めようとしている。

ピュッラやメテュムナの少女たちも、他のレスボスの女たちの集まりも、わたしをよろこばせない。アナクトリアも、輝かしいキュドロもわたしには価値が乏しい。アッティスも、罪深いやり方で愛した他の百人もの女たちも、かつてのようにわたしの目に好ましくは映らない²⁷⁾。(15-19 行)

もしペラスゴイ人 [引用者注：ギリシアの先住民族] のサッフォーから遠く離れることがあなたにとってよいことなら、とはいえわたしが遠ざけられる方がいいという理由をあなたは見つけられないでしょうが、せめて残酷な手紙が哀れな女に伝えるでしょう。わたしの死がレウカスの水の中で見いだされようことを²⁸⁾。(217-220 行)

ボードレルの「レスボス」においては、レスボス島での同性愛は宗教的な祭儀として扱われており、レウカスの投身はその教義に反したことへの贖いと見なされている。

正義と不義の法がぼくらに何を望むだろう？
崇高なる心持てる乙女ら、「列島」の誉れよ
君たちの宗教は、他と同様に厳かで
その愛は、地獄も神をも一笑に付すだろう！
正義と不義の法がぼくらに何を望むだろう？

[中略]

自らの冒瀆の日に命を落としたサッフォー
祭儀と、創られた信仰を侮り
自らの冒瀆の日に命を落とした女は
不敬虔を傲慢にも裁く無頼漢へ

25) Peter Knox, *Ovid's Heroides: Select Epistles*, Cambridge, 1995, p. 12

26) Ovid. *Héroïdes*, *op. cit.*, p. xvii

27) Nec me Pyrrhiades Methymniadesve puellae, /Nec me Lesbiadum cetera turba iuvant. /Vilis Anactorie, uilis mihi candida Cydro; / Non oculis grata est Atthis, ut ante, meis, /Atque aliae centum quas non sine crimine amaui. (*Héroïdes*, *op. cit.*, p. 92)

28) Lesbides aequoreae, nupturaque nuptaque proles, /Lesbides, Aeolia nomina dicta lyra, /Lesbides, infamem quae me fecistis amatae, /Desinite ad citharas turba uenire mea. (*Ibid.*, p. 99. 尚、オウィディウスの引用については Les Belles Lettres 版の仏羅対訳を用い、原則としてラテン語から直接訳出したが、適宜仏訳をも参照した。)

美しい肢体を至高の贄として捧げた⁽²⁹⁾。

このように近代以降のサッフォー伝説の中心をなす、ファオンへの恋とレウカスからの投身のテーマであるが、現代においては史実によらない文学的虚構であるということで大方の意見が一致している⁽³⁰⁾。サッフォーの性的志向などについては断定的な判断を避けてきたウォートンであるが、前書きの中でファオン伝説については懐疑的な立場をとっている。

サッフォーのファオンへの恋物語、そして彼に拒まれたことによるレウカスからの投身は、あまりに長い間暗黙の内に信じられているものの歴史的な根拠がまったく残ってないように思われる⁽³¹⁾。

ヴィヴィアンの筆はさらに苛烈であり、その前書きの中で以下のように切って捨てている。

我々はサッフォーのファオンへの愛について、どれほど寓話的な不確かさが伝承を覆い、それがまったくもって間違っていることを思い知ることとなるだろう⁽³²⁾

レウカスからの投身は寓話に過ぎない⁽³³⁾

「寓話に過ぎない」とまで断じられた投身伝説ではあるが、ルネ・ヴィヴィアン自身もこの伝説を一部踏襲した作品を著していることは指摘しておかなければならない。『サッフォー』に二カ月ほど先立って出版された詩集『喚起』（1903年）に収録された一幕物の韻文劇「サッフォーの死《La Mort de Psapha》」は、サッフォーがレウカスから身を投げ、その遺骸が漂着する場面をもって幕を閉じる。

ギュリンノー：「日が暮れて。サッフォーは愛の忘却へと、
死へと向かってゆく」

エランナ：「望みもなく、戻りたいとも思うこともなく
彼女はゆっくりとレウカスの岩場に降り立つ……」 [中略]

ゴルゴー：「そして私は、サッフォーの遺骸が海から流れてくるのを見た……⁽³⁴⁾」

この韻文劇は、サッフォーとそれを取り巻く少女たちを描いたものであり、そこにファオンの姿はない。サッ

(29) Que nous veulent les lois du juste et de l'injuste ? /Vierges au coeur sublime, honneur de l'Archipel, /Votre **religion** comme une autre est auguste, /Et l'amour se rira de l'Enfer et du Ciel ! /Que nous veulent les lois du juste et de l'injuste? [...] De Sapho qui mourut le jour de son **blasphème**, /Quand, **insultant le rite et le culte inventé**, /Elle fit son beau corps la pâture suprême /D'un brutal dont l'orgueil punit l'impiété /De celle qui mourut le jour de son **blasphème**. (8^e et 14^e strophe de « Lesbos » dans *Les Fleurs du Mal* dans *Œuvres complètes* t. I, Claude Pichois, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1975, pp. 135-6)

(30) 本稿の脚注9参照。また、サッフォーの詩に、臨終に及んで娘やミュティレネの少女たちに語るもの (Wharton, fr. 136) や、老境にあたって自らの身体の衰えを歎ずるもの (Lobel and Page, « fr. 58 » in *Poetarum Lesbiorum Fragmenta*, Oxford, Clarendon press, 1955, p. 41) があることなどは、サッフォーが天寿を全うしたことを示す根拠となりうる。尚、後者の断片についてはベルク (およびそれを底本としたウォートン) の校訂版には収録されていない。

(31) The story of Sappho's love for Phaon, and her leap from the Leucadian rock in consequence of his disdain for her, though it has been so long implicitly believed, does not seem to rest on any firm historical basis. (Wharton, *Op. cit.*, p. 14)

(32) On voit quelles incertitudes fabuleuses entourent la tradition, aussi erronée qu'universelle, de l'amour de Psapha pour Phaon. (Vivien, *Sapho, Op. cit.*, p. x)

(33) le saut de Leucade n'est qu'une fable : (Vivien, *Sapho, Op. cit.*, p. xii)

(34) (Gurinnô) Le soir tombe. Elle va vers l'oubli de l'amour, /Vers la Mort. (Eranna) Sans espoir, sans désir de retour, /Elle atteint lentement le rocher de Leucade... [...] (Gorgô) Et je vois son cadavre emporté par la mer... (R. Vivien, « La Mort de Psapha » dans *Evocations*, lemerre, 1903, p. 54)

フォーは愛と美の女神アフロディテへの跪拝も虚しく、恋に破れて身を投げるのである。その恋の対象は明言されていないが、同詩集の後半に配置された韻文劇「残されたアッティス《Atthis délaissée》」において、サッフォーの愛情に報いなかったことで自分を責めるアッティスの姿がクローズアップされていることから、ヴィヴィアンの意識の中で、サッフォーの投身の原因となったのはアッティスその人であると考えられることはできる。そしてこのアッティスとは、いうまでもなくオウィディウスが「かつてのように好ましくは映らない」とサッフォーに謗らせた少女の名である。

ヴィヴィアンは、同性愛からの脱却と、男性との失恋による自死というテーマを、少女への愛情による自死というテーマに書き換えているのである。それはボードレールにみられるような、男性に傾斜した過ちと、それへの贖いというものですらく、純粋に少女に向けられた愛情だけをその動機としている。そしてその死は、罨のようにいつまでも少女の耳朶に残り続けるのである³⁵。

このテーマの書き換えは、『サッフォー』における最後の詩を見ても明らかである。

夜を深めたまえ、我らを焦がす女神よ！
黄金の靴履ける暁を我らから遠ざけたまえ。
すでに沼の上からは、冷たい蜻蛉の群れが
飛び立っていった。

お前の髪は、ヴェールの影の下で燃えながら
アッティスよ、太陽の赤い炎を湛えていて
花々の酒と、星々の酒が
私を愛で打ちひしぐ。

その諸手に未知なるものを携え
どんな朝日が昇るのかを、我々は知らない。
我々は未来を前にして慄き、我らの夢は
明日を恐れる。

我らの手から抜ける甘美さを無意味に抱き
閉じた臉の下に私は光を見る
薔薇の退廃を喜ぶ女神よ
夜を深めたまえ³⁶。

ヴィヴィアンは、ウォートン、ベルクが収録した170篇の断片のうち125篇を採用し、そのうち52篇に定型韻文の翻案を付しているが、この詩に着想を与えた断片は、ウォートンの書においては130番目に位置している。ヴィヴィアンは採用したテキストの順番についてはかなり自由に配置しており、ベルクが131番以降に配置した断片も所々に収録している³⁷。したがって、130番の断片が最後に置かれている理由を、単に

³⁵ 前述の「残されたアッティス」において、サッフォーの声が「彼方に *dans le lointain*」聞こえる場面がある。これはアッティスを思うあまりに出現したサッフォーの亡霊とも、サッフォーを思うあまりにアッティスが見た幻覚とも解釈できるだろう。「Atthis délaissée」 dans *Evocations*, Lemerre, 1903, p. 113-120

³⁶ Prolonge la nuit, Déesse qui nous brûles ! /Éloigne de nous l'Aube aux sandales d'or. /Déjà, sur l'étang, les fraîches libellules /Ont pris leur essor. //Tes cheveux, flambant sous l'ombre de tes voiles, /Atthis, ont gardé le feu rouge du jour, /Et le vin des fleurs et le vin des étoiles /M'accablent d'amour. //Nous ne savons pas quelle aurore se lève /Là-bas, apportant l'inconnu dans ses mains, /Nous tremblons devant l'Avenir, notre rêve /Craint les lendemains. //Je vois la clarté sous mes paupières closes, /Etreignant en vain la douceur qui nous fuit... /Déesse à qui plaît la ruine des roses, /Prolonge la nuit.. (Vivien, *Sapho, op. cit.*, pp. 145-6)

131 番以降の断片をヴィヴィアンが読んでいなかったからだとする説は成り立ちえず、この配列は偏にヴィヴィアンの恣意によるものであるとよい。故に、詩集の最後を締めくくるこの詩には何か特別な思い入れがあると考えられる。

断片 130 番は、修辞学者のリバニオス (Λιβάνιος, 314-392) の『弁論集 *Oratio*』第十二卷九九篇の一部である。ウォートンが抜粋しているのは以下の部分である。

εἰ οὖν Σαπφῶ τὴν Λεσβίαν οὐδὲν ἐκόλυσεν εὐξασθαι νύκτα αὐτῇ γενέσθαι διπλασίαν^①, ἐξέστω κάμοι τι παραπλήσιον αἰτῆσαι Χρόνε, πάτερ | ἐνιαυτοῦ καὶ μηνῶν, ἔκτεινον^② ἡμῖν τοῦτ' ἄλλο ἐτος οἷόν τε πλεῖστον, ὡσπερ ὅτε Ἡρακλῆς ἐσπείρετο τὴν νύκτα ἐξέτεινας^③⁽³⁸⁾

もし、レスボス民のサッフォーが自身のために、夜が倍の長さになることを祈るのを^①、何もかも妨げないならば、私も似たように乞うことができ、然るべきだ。^{クロノス}時、年月の父君よ、一年を君の可能な限りに延ばしたまえ^②、ヘラクレスが生を受けた時、君が夜を延ばした^③時のように。

断片 121 番以降の「雑録」の章については、ウォートンは必ずしもベルクのようにギリシア語テキストの全文を載せてはおらず、英訳だけのものも少なくない。上記の引用については、下線①の、サッフォーの祈りの部分のみがギリシア語で引用され、それ以外の部分は英訳があるのみである。そして、このウォートンの英訳に、ヴィヴィアンの詩に影響を与えたと考えられる箇所があるのである。Χρόνε で始まる二文目の英訳を引用しよう。

Time, father of year and months, stretch out^② this very year for us as far as may be, as, when Herakles was born, thou didst prolong^③ the night⁽³⁹⁾.

下線②③は、それぞれ ἔκτεινον、ἐξέτεινας と、それに対応する訳語であるが、この二つのギリシア語は、同一の動詞 ἐκτείνω 「引き延ばす」の変化形である⁽⁴⁰⁾。ゆえに同じ動詞で訳しても特に問題はないのであるが⁽⁴¹⁾、ウォートンは文彩のことを考えて異なる二つの動詞で訳している。注目すべきは、下線③の動詞 prolong である。これは、ヴィヴィアンの詩の *prolonge la nuit* に完全に対応する英語であり、ヴィヴィアンがウォートンの影響のもとでこの詩集を編んだことを端的に示すものである。サッフォーのものとして知られるこの祈りには図らずもヴィヴィアンの世界観と通じるものがあり、詩人の詩的関心を大いに刺激したことは想像に難くない。夜はヴィヴィアンの作品で最も頻出する時間帯であり、夜への偏愛は二行目の「暁を我らから遠ざけたまえ *Éloigne de nous l'Aube*」や、十一、十二行目の「我々は未来を前にして慄き、我らの夢は明日を恐れる *Nous tremblons devant l'Avenir, notre rêve / Craint les lendemains.*」といった表現に見られるように朝の拒絶、未来への嫌悪という表現で受けなおされる。夜の希求と、朝の拒絶というテーマが併用されると、ヴィヴィアンがしばしば用いる「無限 *l'Infini*」や「永遠 *l'Éternité*」のテーマと結びつく。また、この詩が少女アッティスへの相聞であることを忘れてはならない。この詩が一種の永遠性を主題としたものであることを考えると、アッティスとの蜜月がいつまでも続くことを願ったものであるといえるのである。

37) Wharton [= Bergk] の 131 番以降の断片のうち、ヴィヴィアンが採用しているものは 133、136、146、148、149、153、167 の七篇である。また、ヴィヴィアンのテキストがウォートンの断片とどのように対応しているかについては前掲の論文 (長澤、2017 年) で図示したので参照されたい。

38) Libanius, *Orationes XII in Libanii opera*, recensuit Richard(us) Foerster, Lipsiae, in aedibus B. G. Teubneri, 1904, p. 44

39) Wharton, op. cit., pp. 156-7

40) ἔκτεινον は二人称単数命令法アオリスト能動態、ἐξέτεινας は二人称単数直説法アオリスト能動態。

41) 例えば、ロエブ古典叢書において当該の部分は、[...] **extend** this year for us as far as you can, as once you **extended** the night [...] と、いずれも extend と訳されている。(Libanius, *Selected Orations*, Volume I: Julianic Orations, edited and translation by A. F. Norman, Harvard university press, 1969, p. 95)

尚、この詩はほぼ同様のものが「サッフォーの韻律にのせて《Sur le Rythme Saphique》」の題で『喚起』にも収録されている。ヴィヴィアンの作品には、この他にもアッティスを主題とした作品がいくつかあるが、『喚起』におけるこの詩はその最初の例である (p. 9)⁽⁴²⁾。他に、『喚起』においてアッティスが特権的に現れる作品としては、アッティスへのかつての愛を悲哀を帯びた色調で歌う「アッティス《Atthis》」(p. 23)、前述の韻文劇「残されたアッティス」(p. 113)、過去の思い出のうち専ら官能的な部分を歌う「追憶《Ressouvenir》」(p. 149)が挙げられる。これらの作品は、ヴィヴィアンの他の詩集に収録されているものと併せて「アッティス詩篇」とでも称すべき作品群を成しているが、大半の作品でアッティスが別れた恋人の象徴として扱われている中で、永遠性を主題とするこの詩は特異な印象を与えるものである⁽⁴³⁾。

アッティスへの不変の愛をうたうこの詩は、レスボスの女たちを棄て、ファオーンのために命を投げ打つオウィディウスの詩と好対照をなしている。これはオウィディウス以来の文学的伝統に対する挑戦であるということができ、ボードレールですらなしえなかった、異性愛に改宗せず永遠に少女アッティスを愛し続けるサッフォー像を作り上げることに成功しているのである。

書誌

(テキスト)

Vivien, Renée, *Sappho, Traduction nouvelle avec un texte grec*, Lemerre, 1903

Wharton, Henry Thornton, *Sappho, A Memoir, Text, Selected Renderings and a Literal Translation*, 4th edition, London, 1898

Bergk, Theodor(us), *Poetae Ilyci graeci*, tome. III, Lipsiae In aedibus B.G. Teubneri, 1882

(参考文献)

Bessou, Bartholomot, Marie-Ange, *L'imaginaire du féminin dans l'œuvre de Renée Vivien*, Presses universitaires Blaise Pascal, Clermont-Ferrand, 2004

Bessou, Bartholomot, Marie-Ange, « Renée Vivien, Sappho et le verger lesbien » in *Renée Vivien, une femme de lettres entre deux siècles (1877-1909)*, Honoré Champion, 2012

Baudelaire, Charles, *Les Fleurs du Mal* dans *Œuvres complètes* t. I, Claude Pichois, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1975

Knox, Peter, *Ovid's Heroides: Select Epistles*, Cambridge, 1995

Lebey, André, *Poésies de Sapphô*, Mercure de France, 1895

Lobel and Page, *Poetarum Lesbiorum Fragmenta*, Oxford, Clarendon press, 1955

Libanius, *Orationes XII in Libanii opera*, recensuit Richard(us) Foerster, Lipsiae, in aedibus B. G. Teubneri, 1904

Libanius, *Selected Orations*, Volume I: Julianic Orations, edited and translation by A. F. Norman, Harvard university press, 1969

Mora, Edith, *Sappho histoire d'un poete et traduction integrale de l'oeuvre*, Flammarion, 1966

Ovid. *Héroïdes*, texte établi par Henri Bornecque et traduit par Marcel Prévost, Société d'Édition « Les Belles Lettres », 1965

Sanders, Virginie, *La poésie de Renée Vivien*, Amsterdam, Rodopi B.V., 1991

Vivien, R, *Evocations*, Lemerre, 1903

Vivien, Renée, *La Vénus des aveugles*, Lemerre, 1904

Vivien, Renée, *Une Femme m'apparut...*, Lemerre, 1904

Zola, Emile, *Correspondances*, tome. VIII (1893-1897), éditée sous la direction de B. H. Bakker, Les Presses de l'Université de Montréal, 1991

沓掛良彦、『サッフォー 詩と生涯』、平凡社、1988年

ドミニック・フェルナンデス『ガニュメデスの誘拐』岩崎力訳、ブロンズ新社、1992年

長澤法幸、『ルネ・ヴィヴィアン訳詩集『サッフォー』—訳詩集の成立を巡って—』、『研究報告集』41号、日本フランス語フランス文学会中部支部、2017年

(42) 『喚起』は1905年に大幅な修正を経て再版されているが、ここでは詩集『サッフォー』との連続性を取り上げるために、あえて1903年の初版本を参照し、そのページ数を記したことを断わっておく。続く三つも同様。

(43) ただし、アッティスがサッフォーのもとから離反し、アンドロメダという女性のもとへ去っていったという史的事実があることから、この少女が別離を象徴する名となるのは当然といえば当然である。